

Michael E. Groher 編 塩浦政男・藤島一郎 訳

嚥下障害

その病態とリハビリテーション

(B 5 判 230 頁 4,800 円 1989 年 医歯薬出版 刊)

木村 彰男

(慶應大学医学部リハビリテーション科)

嚥下は人が生きていく上で最も基本的かつ大切な行為であるが、医学的には、耳鼻咽喉科・消化器科・神経科など様々な領域にまたがるために余り注目されることは少なかった。一方、近年リハビリテーション医学が急速に発達し、また Quality of Life の概念が普及するにつれ、嚥下障害に対しても積極的にリハビリテーション医学の面から取り組む姿勢が見られるようになってきた。本書はこのような状況の中で、まさにタイミング良く出版された待望久しい書物といえる。

嚥下に対しては様々な職種から成るチームアプローチが大切なことが強調されているが、本書の原著者は耳鼻咽喉科・神経科の医師をはじめとして、言語療法士・看護婦・栄養士など多岐にわたっている。一部に重複する箇所も見られるが、それぞれの専門職の視点

から極めて実践的な問題について解説が加えられている。

全体の構成は 3 部、11 章から成り立っている。第 1 部では、まず嚥下障害の病態生理と評価が取り上げられている。嚥下の 3 相（口腔期・咽頭期・食道期）を中心に、それに関連した解剖および神経機構が説明された後、神経学的障害と機構的障害に分けて嚥下障害の病態が詳しく述べられている。神経学的障害ではミオパチー・重症筋無力症などの筋原性病変、脳卒中・筋萎縮性側索硬化症などの神経原性病変を中心に、機構的障害では喉頭切除などの外科的手術に伴う障害について解説が進められている。さらに嚥下障害の評価として、理学的検査・X線による検査・圧測定などが紹介されている。

第 2 部は嚥下障害の治療の実践についての項であるが、主に神経学的障害に関して食物の選択や姿

勢を含めた摂食訓練の方法・摂食に役立つ適切な器具の紹介などが述べられている。

第 3 部は嚥下障害への具体的対処法というタイトルで、看護の方法・栄養学的検討のほか、嚥下障害に対する輪状咽頭筋切開術などの外科的手術が解説されている。そして、チームアプローチによる嚥下プログラムの確立の必要性を力説した最後の章で結ばれている。

さらに嚥下障害者の食事については、訳者らの病院での経験に基づく資料が付録として添付され、本邦での読者には大いに参考になることと思われる。

本書の末尾にも書かれているように、嚥下障害に対するリハビリテーションは今まさに始まったばかりで、今後各方面からの関心の高まりと、しっかりした基礎的研究・臨床的知見の積み重ねが期待される。その意味で本書は医師・療法士・看護婦・栄養士を中心としたこの分野に携わる職種の方々に広く役立つことは間違いないと思われる。